NY エッセイ 90

中瀬有紀

笑顔の絶えない職場



マイアミ、ウィンウッド・ウォールズにて

装置家の友人と照明デザインを担当していた私が、直しのために朝9時に劇場入りしたとき、技術スタッフが誰一人と見当たらず、いまだゴーストライトのみに照らされた暗闇の舞台は、まるで嵐の前の静けさでした。気性の激しい装置家の彼は、すぐさまテクニカル・ディレクター（TD）に電話をかけますが、「プルル」ではなく優雅なクラシック音楽に設定しているTDの電話呼び出し音が余計に彼の怒りを買い、留守番電話に転送されたことでその感情はピークに達しました。「はい○○（TDの名前）です。ただいま電話に出られませんが、僕がいるからもう安心。何でも問題を解決します」といった自信に満ちた録音音声に続く発信音の後、電話のスピーカーから聞こえてきたのは「メモリがいっぱいのため、録音できません」を繰り返す無機質なコンピューターの音声でした。怒りの感情はピークを超えると笑いに転換するのか、彼はケタケタと笑い出し、この頼りにならないTDの話は今でも笑い話となっています。怪我人が出るような大失敗や仕事をすっぽかして現場に現れないような無責任はまったく笑えませんが、劇場や収録での些細な出来事はなぜがユーモアにあふれ、スムーズに終えた現場よりも、擦った揉んだが絶えなかった現場のほうが酒の肴になるようです。

その証拠に、「裏方に焦点をあてたテレビドラマの構成が頭の中にあふれていて、これを公表するときっと売れる」と自慢する裏方スタッフを、私は少なくとも2人知っています。舞台とイベントの裏方として40年のキャリアをもつそのうちの1人は、かれこれ数十年間その構成を練り続けているらしく、そのタイトルは「ザ・バックステージ」。日常の技術的な挑戦と達成、本番前の皆が走り回っているハラハラ感、また誰が誰と付き合って別れたかという恋愛ネタも交えたメロドラマは確かに面白そうです。

舞台裏で実際に騒動の渦中にいる人間の視点からは、「笑いごとではない。これは重大な問題だ！」と怒られそうですが、事態から少し距離を置いてみると確かに可笑しなことばかりです。たとえば、変更が多いことで名高い照明デザイナーの下で働いていた友人は、そのデザイナーがすべての器材を2股（2台を1つのチャンネル）で操作したいか、それとも1台1台個々にチャンネルを設定したいか、1日に3度変更したとぼやいていました。その都度図面のチャンネル番号を変更するアシスタントとしては、ただでさえクライアントからの変更に追われて、なおかつ「図面はまだか」とせかされ、それに輪をかけてデザイナーが優柔不断だとたまったもんじゃない、とストレスを感じているようでしたが、傍から見ているとチャンネル番号を変え続ける姿はまるで喜劇です。

“The Show Must Go On” はアメリカのショービジネスでよく使われるフレーズです。どんなことがあってもお客さんの待つステージは開けなければならないという意味で、気象状況や事故、テロリストなどによる攻撃行為以外の理由で予定されていた公演がキャンセルになることは滅多にありません。そして大体のプロダクションは雨降って地固まるのか、準備期間中どんなにドラマが繰り広げられても結果的には皆笑顔で初日を迎えます。先述の気性の激しい装置家の友人は、初日後にスタッフ全員にメールを送り、「感謝の言葉を言っても言っても言い切れない。これまでのキャリアの中でも最も忘れられない、勇気付けられるプロダクションでした。みんな、ありがとう！」と、すっかり以前のどたばたを忘れているようでした。これだからこの職業をやめられません。